

『ゾウのはな子が教えてくれた父の生き方』

山川宏治（東京都多摩動物公園主任飼育員）

「殺人ゾウ」の汚名一

武蔵野の面影を残す雑木林に囲まれた東京・井の頭自然文化園に、今年還暦を迎えるおばあちゃんゾウがいます。彼女の名前は、はな子。私が生まれる以前の昭和 24 年に戦後初めてのゾウとして日本にやってきました。当時まだ 2 歳半、体重も 1 トンにも満たない小さくかわいい彼女は、子供達の大歓声で迎えられました。遠い南の国タイからやってきたはな子は、たちまち上野動物園のアイドルとなりました。

ところが、引っ越し先の井の頭自然文化園で、はな子は思いがけない事故を起こします。深夜酔ってゾウ舎に忍び込んだ男性を、その数年後には飼育員を踏み殺してしまったのです。「殺人ゾウ」。みんなからそう呼ばれるようになったはな子は、暗いゾウ舎に 4 つの脚を鎖でつながれ、身動きひとつできなくなりました。餌をほとんど口にできなくなり、背骨や肋骨が露わになるほど身体は痩せこけ、かわいく優しかった目は人間不信でギラギラしたものに変わってしまいました。

飼育員の間でも人を殺したゾウの世話を希望する者は誰もいなくなりました。空席になっていたはな子の飼育係に、当時多摩動物公園で子ゾウを担当していた私の父・山川清蔵が決まったのは昭和 35 年の 6 月。それからはな子と父の 30 年間の始まりでした。「鼻の届くところに来てみろ、叩いてやるぞ！」と睨みつけてくるはな子に怯むことなく、父はそれまでの経験と勘をもとに何度も考え抜いた結果、着任して 4 日後には 1 ヶ月以上繋がれていたはな子の鎖をはずしてしまうのです。そこには、「閉ざされた心をもう一度開いてあげたい」「信頼されるには、まず、はな子を信頼しなければ」という気持ちがあったのでしょう。父は、いつもはな子のそばにいました。出勤してまずゾウ舎に向かう。朝ご飯をたっぷりあげ、身体についた糞を払い、外へ出るおめかしをしてあげる。それから兼任している他の動物たちの世話をし、休憩も取らずに暇を見つけてはバナナやリンゴを手にゾウ舎へ足を運ぶ。話しかけ、触れる……。 「人殺し！」とお客さんに罵られた時も、その言葉に興奮するはな子にそっと寄り添い、はな子の盾になりました。

そんな父の思いが通じたのか、徐々に父の手を舐めるほど心を開き、元の体重に戻りつつありました。ある日、若い頃の絶食と栄養失調が祟って、歯が抜け落ち、はな子は餌を食べることができなくなりました。自然界では歯がなくなることは、死を意味します。なんとか食べさせなければという、父の試行錯

誤の毎日が始まりました。どうしたら餌を食べてくれるだろうか……。考えた結果、父はバナナやリンゴ、サツマイモなど 100 キロ近くの餌を細かく刻み、丸めたものをはな子に差し出しました。それまで何も食べようとしなかったはな子は、喜んで口にしました。

食事は 1 日に 4 回。1 回分の餌を刻むだけで何時間もかかります。それを苦と思わず、いつでも必要とするときにそばにいた父に、はな子も心を許したのだと思います。定年を迎えるまで、父の心は一時も離れずはな子に寄り添ってきました。自分の身体ががんという病に蝕まれていることにも気づかずに……。

はな子と別れた 5 年後に父は亡くなりました。後任への心遣い、はな子へのけじめだったのでしょう。動物園を去ってから、父はあれだけ愛していたはな子に一度も会いに行きませんでした。

亡き父と語り合うー

思えば父の最後の 5 年間は、はな子の飼育に完全燃焼した後の余熱のような期間だったと思います。飼育員としての父の人生は、はな子のためにあったと言っているのかもしれませんが。残念なことに、私には父と一緒に遊んだ思い出がありません。キャッチボールすらしたことがないのです。家にじっとしていることもなく、自分の子どもよりゾウと一緒にいる父に「なんだ、この親父」と反感を持つこともありました。

ところが家庭を顧みずに働く父と同じ道は絶対に歩まないと思っていたはずの私が、気がつけば飼育員としての道を歩いています。高校卒業後、都庁に入り、動物園に配属になった私は、父が亡くなった後にあのはな子の担当になったのです。それまでは父と比べられるのがいやで、父の話題を意識的に避けていた私でしたが、はな子と接していくうちに、ゾウの心、そして私の知らなかった父の姿に出会いました。人間との信頼関係が壊れ、敵意をむき出しにしたゾウに再び人間への信頼を取り戻す。その難しい仕事のために、父は、いつもはな子に寄り添い、愛情深く話しかけていたのです。だからこそ、はな子は、こちらの働きかけに素直に応えてくれるようになったのだと思います。

一人息子とほとんど話もせず、いったい何を考え、何を思って生きてきたのか、生前はさっぱり分かりませんでした。はな子を通じて初めて亡き父と語り合えた気がします。私は「父が心を開かせたはな子を、もう一度スターに」と、お客様が直接おやつをあげるなど、それまではタブーとされてきたはな子との触れあいの機会を設けました。父、そして私が見てきた本来の優しいはな子の姿を多くの方に知ってほしかったのです。人々の笑顔に包まれたはな子の姿を父にも見て欲しいと思います。

【校長雑感】

「信頼されるには、まず信頼しなければ……」まさに教育の要諦ですね。